

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520194

研究課題名(和文) ロココ時代のフランス宮廷衣裳の復元的研究－欧州種の養蚕からドレス制作まで－

研究課題名(英文) Restoration study of the French court costumes of the Rococo era-Make up to dress and sericulture the silkworm eggs of Europe

研究代表者

伊豆原 月絵 (IZUHARA, Tsukie)

日本大学・理工学部・教授

研究者番号：40440036

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀のロココ時代のフランス宮廷衣裳の美意識を明らかにすることを目的とし、長年、絹生地の風合いを求めてドレスのフォルムの素材に拘り探していたが現存しないため、往時の欧州の蚕品種を研究調査したところ、蚕業技術研究所に研究のため遺伝資源として保存されていることが判明した。その蚕を9万頭まで増やし養蚕して、往時の方法で生繭から座繰りで製糸し製織し、ドレスを制作した。この生地は、輝く白さをもち、軽く、立体を保つ張りがあるが柔らかい特徴があった。次に、西陣の最後の摺り込みの伝統工芸士に天然染料で絋染を依頼し、その技術をビデオ撮影を行って記録し、手織りで製織し宮廷ドレスを制作し、美意識を検証した。

研究成果の概要(英文)：In this paper, the aesthetic sense of women's dress in the eighteenth century French court is described on the basis of the findings from the restoration work. In the study of the restoration of the 18th century French court costumes, in previous restoration work, a problem was left unresolved that the sense of touch between the original and the restored cloths was slightly different from each other. Therefore we started to make researches on reeling of silk yarn, the material of the fabric, and European species of silkworm eggs of the sericulture. European silkworm varieties of bygone days. It was investigated and found to be conserved as resources for research in The Dainippon Silk Foundation Institute of sericulture. And we did sericulture the 90,000 silkworm. Make the silk weaving ware lightly, there is a tension to keep the three-dimensional, but there was a soft features. Then, traditional craftsman dyed with natural dyes at the Kasuri, and we sewed the court dress.

研究分野：美学、服装史、博物館学、修復保存学

キーワード：ロココ宮廷衣裳 服装史 美学 復元 蚕遺伝資源 養蚕 絋技術記録 ドレス制作

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の伊豆原月絵は、服飾美学（服装史・染織史・構成技術史）の立場から、欧州の博物館資料を調査していた。2006年からロココ時代の宮廷衣裳のフォルムに着目し、学館協働事業を行っていた神戸ファッション美術館の収蔵品資料を調査研究し、復元研究から往時の美意識を解明しようと試みていた。大学からの研究助成金を4年間受け、神戸ファッション美術館の収蔵品を調査し、4体のロココ時代の衣裳を復元した。サイズの計測方法は、独自に開発した方法を用いて計測し、詳細な衣裳のサイズデータおよび縫製技術の調査を記録し、第二次資料を作成した。その第二次資料に基づき、織物およびドレスの復元制作を行い、復元的研究を行っていた。その成果は、神戸ファッション美術館や目黒区美術館に於いて、図1のように展示された。



図1 ロココ時代の宮廷衣裳の復元

### (1)計測方法

#### ①基本的な計測方法

基準線を引き、5mmピッチで計測を行い、1着のドレスでは、およそ10,000箇所を計測を行った。また、ドレスの糸を解かないとわからない箇所の糸を解くことなく、マイクロSCOPEを用いた撮影や、テープを入れて確認を行った。

#### ②独自に開発した計測方法

実物ドレスの生地と同じ紋様をイラストレーターでレイヤーにして捺染を行い、その実物衣裳の生地と同じコピー生地を作成した。実物ドレスと、コピーの生地の紋様を確認しながら、ギャザーを寄せ、縫製し、実物ドレスと同じフォルムとなり、紋様の見え方も同じであることを確認した後、その縫った部分を解いて、縫い目の印を付け、ギャザーの角度などを計測し、見えないところを憶測や、縫い手の技術に頼ることなく、計測し、数値を残すことに徹底した。

③織物については、織組織、織り糸の太さ、撚りなど、マイクロSCOPEなどを用いて詳細に調査した。

④実物ドレスを復元するために、精緻な計測方法による記録と縫製技法についての記録を整理し、第二次資料を作成した。

### (2)復元について

①詳細な計測データおよび縫製技術の結果に基づき、織物組織や織物の糸の太さや撚り、

などを検討して、宮廷衣裳の復元を行った。

### (3)宮廷衣裳の復元製作の結果

①これらの復元研究により、縫製技術および往時に求められていたフォルムや美意識についての研究は、成果を得られた。

しかし、第一次資料の実物ドレスの織物の風合いと復元織物のそれは、同じではなかったことが、研究としては、やり遂げたことにはならないと考えた。

②織組織や糸の太さなどは、同じなのに、織物の風合いが違うことから、衣裳の生地「織糸」に着目し、往時の絹糸について、調査を行い、試織を重ねていた。

### 2. 研究の目的

研究代表は、緻密な計測方法にもとづき、織物の技法や繰糸・製糸の方法や数値の上で同一であるのに、復元製作のドレスの織物の風合いだけは、同じにすることができなかった。フォルムも含め、ほぼおなじ形であるが、風合いが違えることの原因を解明したく、本研究を行うに至った。

本研究では、実物資料と同じ風合いを求めて、絹織物の材料糸の蚕品種に着目した。蚕品種の特性が織物の風合いに関係するのではないかと仮定した。

蚕品種の調査研究を行い、往時の欧州の蚕品種を探し、養蚕し、絹糸を作り、製織を行い、それを用いてドレスを制作し、フォルムや風合いを明らかにしようと試みた。それらにより、往時の美意識を表すための技術や背景を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

復元的研究は、実物ドレスのパターン、サイズ、縫製技法を再現することで検証することができる。しかし、衣裳の場合、織物の風合いが、ドレスのフォルムに関係することから、衣裳の生地や美意識に拘り、蚕品種、繰糸・製糸方法、染色、製織などについて、それぞれ文献調査および各種試験を行い、検討を行った。

#### (1)欧州の蚕品種についての調査

フランスとイギリスの現地調査に於いて、養蚕と織物、衣裳についての調査を行い、往時の蚕品種についての資料を収集した。

(2)日本では、遺産資源として保存されている蚕品種について調査し、その結果、明治期に創設された大日本蚕糸会（現在の一般財団法人 大日本蚕糸会）に蚕品種の研究のために保存されていた欧州の蚕品種が、保存されていることを確認し、協力を依頼した。

(3)この蚕品種は、毎年、保存のために卵（蚕種）を孵しては、蚕種を産ませて、保存するという、大変貴重な研究を長年続けておられて、現在まで多くの貴重な蚕品種の原原種や原種を保存されている。

#### 1年目（2012年度）

文献調査の結果から、一般財団法人 大日

本蚕糸会蚕業技術研究所（井上元所長）に保存されていた欧州種（原原種）のうち、2種類の蚕品種を選択し、卵を孵し飼育をして頂いた。この2種類の蚕品種は、「ローザ」と「セヴェンヌ白」である。これらを、一般財団法人 大日本蚕糸会蚕業技術研究所の増卵（蚕種）および養蚕の技術協力を得られて孵し、養蚕を行った。

(1)この生繭を用いて、繰糸方法および繰糸温度・繰糸速度については、製糸の研究者である岡谷蚕糸博物館館長の高林千幸氏の研究協力を得て、文献調査および繰糸試験を繰り返し、製糸方法を決定した。

(2)2012年4月から8月にかけて、研究協力者の神戸ファッション美術館 主任学芸員の浜田久仁雄氏の協力の下、神戸ファッション美術館所蔵のロココ時代の女性宮廷衣裳の織物について染織技術およびドレス制作の技術を解明するため、マイクロスコープを用いて研究調査を行った。

(3)2012年5月の春蚕期と初秋蚕期に、一般財団法人 大日本蚕糸会・蚕業技術研究所（井上元所長の協力を得て、蚕種（卵）を育成は、主任研究員の代田丈史氏が担当し、養蚕は、浅野栄子氏を中心として行った。これらの蚕品種は、現行の改良された蚕品種に比べ、原原種のため、小さく繊細で弱いため、育成が難しく、養蚕方法の検討を行った。

(4)養蚕グループの長年に亘る蓄積した養蚕に関する知力（温度・湿度管理や飼料など）に加え、上簇の際は、小さい蚕のため、自然上簇ができず、簇に入れる手作業を行うなど、熟練の技術と細やかで多大な労力の協力によって、優れた研究成果が得られた。

(5)製糸については、代表者が論文調査を行い、研究協力者の岡谷蚕糸博物館館長の高林千幸氏が温度、速度について繰糸試験を行い、その結果に基づいて特殊な蚕種を扱う繰糸業者の宮坂製糸所（長野県岡谷市）において、生繭から座繰りで繰糸を行った。

(6)研究代表者は、カンボジアに於いての蚕種および養蚕の現地調査を行い、日本で養蚕ができなかった場合のリスク管理として、カンボジアでの養蚕および製糸をすることも鑑み、養蚕農家を確認した。

(7)4月の国際服飾学会大会に於いて、復元の技術と道具についての発表を行った。また、8月には、国際服飾学術会議（台湾）に於いて、美意識について、口頭発表を行った。

(8)織物の研究協力者・吉田紘三氏が広幅の製織機を往時の織機に基づいて考案し、その織機にて数種類の製織試験を行った。

(9)研究代表者は、フランスで得られた資料に基づき、染色試験を行い、染料を選定した。

## 2年目（2013年度）

(1)一般財団法人 大日本蚕糸会 蚕糸科学研究所から製糸および繊維試験の研究協力を得られた。その結果、ドレス制作のための蚕品種について検討し、「セヴェンヌ白」の蚕

種（卵）を用いることを、決定した。

(2)この「セヴェンヌ白」を一般財団法人 大日本蚕糸会蚕業技術研究所（井上 元所長）の蚕種（卵）の提供および養蚕、飼育の技術の提供を得られて、増種（卵を孵しては、生ませて卵を増やす）し、2年間で9万頭まで増やし、研究協力の下、養蚕を行った。

(3)9万頭の生繭を、蚕業技術研究所からクール宅急便で長野県岡谷市の宮坂製糸所に送り、岡谷蚕糸博物館館長の高林千幸氏の指導の下、繰糸方法および繰糸温度・速度に留意し、座繰りで繰糸を行った。

(4)染料については、研究代表者の伊豆原月絵が文献調査をした結果と欧州蚕種のセヴェンヌ白を染色した試験糸を基に検討し、京都の株式会社田中直染料店の染織研究所に於いて、さらに、天然染料の染色試験を行った。

(5)欧州種（原原種）の蚕種を蚕業技術研究所の技術協力および研究助成により増種し、生繭から座繰りで繰糸した糸を用いて手織りにより製織を行い、風合い試験を行った。

(6)研究代表者は、8月～9月にかけて、南フランスに於いて織物および養蚕についての調査を行い、養蚕の現状および往時の資料を入手し、衣裳については、博物館にて資料収集を行った。

(7)緋糸については、染織の研究者や染織作家、染織の職人の方々にヒアリング調査をし、見解を求めた。緋の伝統工芸士の方に、マイクロスコープの資料を確認してもらったところ、復元する実物資料の染織方法は、摺り込みの技法であると、その理由を明解に述べられ、研究代表者の仮説が立証できた。

(8)研究代表者は、2014年3月には、イギリスの博物館調査に加え、18世紀の織物および養蚕の調査を行った。フランスとイギリスの海外調査の結果を踏まえ、田中直染料店の研究所の協力で最終的な染色試験を行った。

(9)緋糸の染色は、京都西陣在住の伝統工芸士の大江嘉昭氏に依頼し、摺り込みの道具作成、デザインの確認、染色方法の確認を行った。

また、染色材料は、染織試験の結果から、適するものを調合した。染色材料の調達不具合や調合調整などに手間取り、染色材料の提供が遅れ、摺り込みによる本格的な染色は、2014年度に延期された。

(10)これらの予備試験の緋糸を用いて、京都の吉田手織工房に於いて試織が行われた。

## 3年目（2014年度）

(1)欧州蚕品種（原原種）の繰糸と製織については、2年目と3年目に、一般財団法人 大日本蚕糸会蚕業技術研究所の蚕種（卵）の提供および養蚕、飼育の技術の提供で得られた生繭を宮坂製糸所で繰糸した糸を用いて、製織を行った。

(2)品種の特徴を明らかにするために無撚りで合糸せずに、吉田紘三氏の指導の下、手織りにより白生地を製織した。細い原糸を用いたため、技術を要したが、白く輝き、上品な

光沢の軽く張りのある織物が制作された。  
(3)研究代表者が、欧州蚕種の特性を明らかに  
なるよう考慮しデザインを行い、研究協力者  
の高木麻里、澁谷摩耶の協力を得て、ドレス  
制作を行った。そのドレスは、2014年の11  
月に長野県岡谷市にて開催されたシルクサ  
ミット(参加者150名)に於いて、研究代表  
者の伊豆原月絵が招待講演の際、図2のよう  
に会場に展示し、研究者および一般の人々に  
公開し広く社会に研究の成果を示した。



図2 欧州蚕種の原因種・セヴェンヌ白で製作

#### 4年目(2015年度)

3年目に、欧州種の原因種、「セヴェンヌ白」  
を一般財団法人 大日本蚕糸会蚕業技術研究  
所(新保 博所長)の9万頭の蚕種(卵)の  
提供および養蚕、飼育の技術の提供を得られ  
た。この生繭を宮坂製糸所にクール宅急便で  
送り、製糸した。その糸を用いて、京都西陣  
の最後の職人といわれている、「摺り込みに  
よる緋」を行う伝統工芸士の大江嘉昭氏に依  
頼し、図3のような摺り込み技法による緋の  
技法を復元した。

(1)2015年、伝統工芸士の大江嘉昭氏により、  
緋の摺り込み作業が1ヶ月ほど行われた。

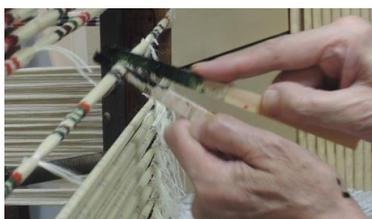


図3 摺り込みの作業

ロココ時代の緋織は吉田紘三氏の指導の  
下、吉田紘三氏の補助として久野まい氏が担  
当し、併せて緋織りの記録調査を行った。

(2)2016年1月末より、織り上がった、その  
摺り込みの技法による緋の織物を用いて、研  
究協力者の澁谷摩耶と研究代表者は、宮廷衣  
裳の制作を行った。

(3)2016年2月に日本大学理工学部で報告会  
を開催し、国際服飾学会の第3回研究会では、  
研究代表者が招待講演を行い、図4のように、  
制作した緋(摺り込み)のドレスを展示した。  
そこでは、本研究の詳細について、70名の研

究者および一般参加者に講演し、広く社会へ  
研究成果を公開した。

#### 4. 研究成果

##### (1)ドレスのフォルムの再現と養蚕

①本研究では、「現在の蚕品種にはない特徴  
をもつ蚕品種の絹が、往時の欧州で使われて  
いた」という仮説に基づき、研究を進めたが、  
欧州種の原因種(卵)を飼育し、生繭  
から糸を繰り、製織を行い、その織物の風合  
いを生地で確認し、ドレスを製作することで、  
「立体を保つ張り」「柔らかなふくらみをも  
つ」風合いを、確認することができた。欧州  
の原因種は、やわらかな曲線を表すフォルム  
を作り出す織物であることが、立証できた。  
②欧州種の原因種「セヴェンヌ白」の養蚕  
は、容易ではなかった。この欧州の原因種と  
最も多く飼育されている現在の普通蚕品種  
について、蚕糸科学研究所で試験していただ  
いた。その結果、2015年の春蚕期に蚕業技  
術研究所で育てた蚕のうち、普通蚕品種の重  
さは2.09gで、糸となる繭の層は、48.6cgで  
あるのに対して、この欧州の原因種は、1.13g  
と小さく繭の層は、12.6cgであり、普通蚕品  
種の繭の大きさの約半分であり、糸を作る繭  
の層は約26%と薄い。このように、欧州種  
の原因種の蚕は、小さく、糸を繰る部分も少  
ない。その上、飼育は難しく、製糸をするに  
も、繭層が薄いため、技術を要した。

③フランスの調査では、既に養蚕は行われて  
おらず、養蚕の歴史を伝承するプログラムが  
博物館やNPO法人などで行われていた。

④日本でも、養蚕農家は、減少の一途であり、  
平成17年が1590戸、平成25年は、486戸  
になっていることから、養蚕の技術継承も難  
しく、繭の生産量の減少の結果、製糸業も減  
少し、繰糸の技術の伝承も難しくなっている。  
⑤日本が明治期に殖産興業として製糸業に  
力を入れ、生糸の品質向上を目指し、蚕品種  
の改良研究のために原因種を輸入していた。  
その蚕種を、現在も継続して、毎年、孵化さ  
せて飼育し、蚕種を研究のために保存してい  
る。世界の養蚕の文化の火を絶やさずに継承  
しているのは、日本にしかなかったことがわ  
かった。この日本の研究が国際的にも意義が  
あり、その養蚕の研究に対する真摯な姿勢と  
熱意は、誇れるものであり、感銘を受けた。

##### (2)染織技法について

①伝統工芸士の方の高齢化は否めない。今回  
の復元研究で緋の技法の1つである、細い割  
り箸状の板に糸を挟んで、紋様部分を染める  
「摺り込みの技法」で染色を行う、西陣最後  
の伝統工芸士といわれる大江嘉昭氏が、既に  
仕事を辞めていたにもかかわらず、本研究の  
意義を汲み取り、協力を得られたことで、染  
織技術の再現ができた。また、大江さんから  
は、幾度も木の板で染料を糸に擦り合わせて  
染色する摺り込みの技法では、現在の絹糸で  
は毛羽立ち、切れてしまうが、このセヴェン  
ヌ白は、細いのに強く、染色し易い良い糸で

あったので摺り込みができたと言われた。  
②「摺り込み技法」で染めた無撚りの糸を用いて手織りを行ったが、吉田紘三氏の高い技術があり、復元織物を織上げることができた。



図4 摺り込み（緋）生地ドレス

### (3) 伝統文化のこれから

①日本や世界の服飾の伝統文化を支える染織技術の継承の難しさのひとつに、染織材料である「絹」の蚕品種や養蚕の問題が大きく関係することがわかった。本研究の大きな課題であった、欧州種の養蚕を成し得たのは、およそ100年前に、欧州より渡った蚕品種を、大日本蚕糸会蚕業技術研究所が毎年孵化させ卵を保存するという、気の遠くなるような長い期間、継続して研究を行っていたからに他ならない。この欧州種の原原種の養蚕が可能になり、白生地によるドレス制作を行い、風合いやフォルムの検証を行うことができた。また、往時の染色技術の再現を行う際、染織技術についても、検証できた。

②本研究の目的は、欧州蚕種の養蚕から織物を織り、ドレスを製作し、フォルムを検証すること、もう一つは、往時の織物の技法を再現し、染織技法の技術の記録と検証を行うことであり、当初の研究の目標が達成できた。

③その上、最終年度には、ドレス制作に必要な生地分の欧州蚕種の繭の提供がなされ、摺り込みによる緋の染織生地で18世紀のロココ時代の女性宮廷衣裳を再現することができた。このことは、フォルムだけでなく、色彩や紋様などから、往時の美意識について検証することができた。また、染・織の伝統技術の映像による記録保存も行い、第二次資料の作成も行えた。今後は、服装史や服飾美学の研究に活かすとともに、本研究で甦った欧州蚕品種などの研究が、国産絹の開発につながり、社会貢献ができるよう、実用化に向けて研究を続けたい。

### 謝辞

最後に、一般財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所・前所長 井上元氏ならびに所長の新保 博氏には、欧州蚕種（卵）と養蚕の無償の技術提供を頂き、ご教示いただきましたこと、深く感謝申し上げます。

科学研究費助成を受け、多くのみなさまから、この研究への無償の協力を得られ、研究

が大きく発展し、このような成果に繋がりましたこと、深く感謝し、お礼を申し上げます。

### 参考文献

1)一般財団法人大日本蚕糸会、シルクレポートNo.28、統計資料、(農林水産省統計情報部調査、全国農業協働組合連合会調査、農林水産省生産局、大日本蚕糸会資料を集計調査)、大日本蚕糸会 2013年1月、pp41-45

2)伊豆原月絵:18世紀フランス宮廷女性の美意識の変遷—体型と姿勢の関係—,pp.40-48,大阪樟蔭女子大学研究紀要第1号,2011

3)伊豆原月絵:フランス宮廷衣裳の復元研究—計測方法と資料の整理—大阪樟蔭女子大学論集,第47号,pp85-94,2009

4)Norah Waugh :The Cut of Women's Clothes 1600-1930, Theatre Art Books, 1968

5)Gazette des atours de Marie-Antoinette Garde -robe des atours de la reine -, Gazette pour l'année 1782 - Centre historique des Archives, nationaux, RMN, 2006

6)DE BOYSSON Bernadette, Marie-Antoinette à Versailles, Le goût d'une reine, Somogy, Musée des Arts décoratifs de Bordeaux, 2005

### 注

1.養蚕農家数：一般財団法人大日本蚕糸会の調査では、養蚕農家は、平成17年が1590戸、平成18年が1345戸、平成22年には、756戸となり、平成17年の約半分になった。その後も減少を続け、平成25年は、486戸になっている<sup>1)</sup>。

2. 国内の養蚕農家の繭の生産：平成17年は626t生産していたが、平成22年が265t、平成25年になると168tと3分の1以下に減少している<sup>1)</sup>。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

1.伊豆原 月絵 18世紀フランス宮廷衣裳の復元研究—欧州蚕品種による織物の特性—, 第62回シルク学会要旨集, 62巻, p 14, 2015年5月、査読あり

2.Mai Kuno \*1, Tsukie Izuhara, An observational study of Cambodian sericulture - as part of fundamental research on textile restoration-, pp150-151 August, 2014, 査読あり

3. Tsukie Izuhara, Miki Kawase, A study on the silkworm eggs of Europe - Restoration of textile -, pp148-149, August, 2014, 査読あり

4. 伊豆原 月絵、久野 まい、他1名、カンボジアの養蚕と染織についての実証的研究、国際服飾学会、p8、2014年4月査読あり

5. 伊豆原 月絵、高木 麻里、澁谷 摩耶、久野 まい、昭和初期の子供服についての実証的研究 -縫製技法と道具について- 国際服飾学会大会論文集、p4、2013年6月、査読あり

6. Tsukie Izuhara, Empirical research on the aesthetic sense for the women's costumes at the 18th century French court, The 25th International Costume Congress 2012, pp.29-32、査読あり

[学会発表] (計9件)

1. **招待講演** 伊豆原 月絵、ロココ時代の宮廷衣裳の復元-欧州蚕品種を求めて-【シンポジウム】「服飾資料を読み解く」服飾美学会平成28年度大会、2016年6月4日、関西学院大学東京丸の内キャンパス(東京都・千代田区)

2. **招待講演** 伊豆原 月絵、ロココ時代の宮廷衣裳の復元的研究-養蚕からドレス製作まで-科研報告、国際服飾学会第3回研究会、2016年2月27日、日本大学理工学部駿河台キャンパス、(東京都・千代田区)

3. 伊豆原 月絵、18世紀フランス宮廷衣裳の復元研究-欧州蚕品種による織物の特性-、第62回シルク学会、2015年、5月21日、岡谷商工会議所、(長野県・岡谷市)、査読あり

4. **招待講演** 伊豆原 月絵、18世紀ロココの宮廷衣裳の復元-絹の風合いを求めて-、シルクサミット招待講演 2014年11月28日、岡谷商工会議所(長野県・岡谷市)

5. Mai Kuno, Tsukie Izuhara, An observational study of Cambodian sericulture - as part of fundamental research on textile restoration -, August 20-21, 2014, 学習院女子大学(東京都・新宿区)、査読あり

6. Tsukie Izuhara, Miki Kawase, A study on the silkworm eggs of Europe - Restoration of textile -, The 26th International Costume Congress, August 20-21, 2014, 学習院女子大学(東京都・新宿区)、査読あり

7. 伊豆原 月絵、高木 麻里、澁谷 摩耶、久野 まい、昭和初期の子供服についての実証的研究 -縫製技法と道具について- 国際服飾学会大会、2013年6月8日、神戸ファッション美術館(兵庫県・神戸市)、査読あり

8. Tsukie IZUHARA, Empirical research on the aesthetic sense for the women's costumes at the 18th century French court, The 25th International Costume Congress, National Science and Technology Museum, TAIWAN, August 21-23, 2012, 査読あり

[図書] (計2件)

1. 伊豆原 月絵、繭から復元したロココ時代の宮廷衣裳1 - 染織情報アルファ-、染織と生活社、pp8-9、2016年6月20日

2. 伊豆原 月絵監修、Fashion-世界服装全史- 東京堂出版、2016年2月11日、pp1-576

[その他]

1. 欧州蚕種の絹糸手織り白生地 「100人展」展示、伊豆原 月絵、久野 まい、2014年10月25日~26日、京都府京都文化博物館(京都府・京都市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊豆原 月絵 (IZUHARA, Tsukie)  
日本大学・理工学部・教授  
研究者番号: 40440036

(2) 研究協力者:

- ・井上 元 (INOUE, Hajime)  
蚕業技術研究所元所長
- ・新保 博 (SINNBO, Hiroshi)  
蚕業技術研究所所長
- ・代田 丈史 (SIROTA, Takeshi)  
蚕業技術研究所主任研究員
- ・浜田 久仁雄 (HAMADA, Kunio)  
神戸ファッション美術館首席学芸員
- ・高林 千幸 (TAKABAYASHI, Chiyuki)  
岡谷蚕糸博物館館長
- ・吉田 紘三 (YOSHIDA, Kozo)  
吉田手織工房主催者
- ・富山 弘基 (TOMIYAMA, Hiroki)  
財団法人手織技術振興財団顧問
- ・久野 まい (KUNO, Mai)  
大原和服専門学校講師
- ・高木 麻里 (TAKAGI, Mari)  
文化服装学院講師
- ・澁谷 摩耶 (SHIBUYA, Maya)  
文化服装学院講師
- ・一般財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所 (Institute of Sericulture, Dainippon Silk Foundation)
- ・株式会社田中直染料店 (TANAKANAO SENRYOTEN) (順不同)